

グリーンデータブックあいちの目的と意義

本県では、2001年に「レッドデータブックあいち植物編」、2002年に「同動物編」を刊行し、2009年にはそれらの改訂版、2015年にはレッドリスト見直しに伴って追加された種についての補遺を公表して、愛知県全体で絶滅が危惧される動植物種に関する情報を整理してきました。

また、県内に本来生息・生育していない移入種については、「ブルーデータブックあいち2012」を刊行し、主要種についてはレッドデータブックと同じ形式で情報を整理し、それ以外の種については県内を17区画に分けて分布情報を整理してきました。

レッドデータブック及びブルーデータブックは、いずれも現在その改訂作業を行っており、将来にわたり、状況の変化に対応して内容を改めていく予定です。

しかし、レッドデータブックやブルーデータブックに掲載されていない大部分の動植物種については、多くの県民は県内での有無、分布等について、十分な情報を得ることができない状況です。

例えば、レッドリストに掲載されていない種の中には、県内で初めて記録され、レッドリスト掲載種以上に保全の重要性が高いものもありますが、レッドリスト作成に直接関与していない人々には、そのような種と検討の結果リスト外と判断された種（普通種）との区別がつかず、結果として、重要な自然要素が失われてしまうおそれがあります。

レッドリスト／レッドデータブックは、2回の改訂を経て、かなりの精度に達していると思われませんが、一方で普通種のリストも整備しておく必要があります。

また、県内各地で自然環境を保全し、生態系ネットワークを構築する活動を行うためには、希少なレッドリスト掲載種よりも、普通種のうち

- ・ 県全体では絶滅が危惧されてなくても、ある地域では絶滅が危惧される種
- ・ 絶滅が危惧されるほどではないが、その地域の自然環境を特徴づける種
- ・ 環境指標性が高く、その種が生育できる環境を保全することが地域の自然環境保全を考えるために重要な種

などに着目することが、生態系ネットワークを形成する上でとても重要ですが、これらの種について保全活動を行おうとしても、当事者は県内全域についての情報を得ることが困難な状況です。

つまり、我々が、生態系ネットワークの形成を推進していくためには、「このような種に特に注目するとよい」と思われる指標性の高い種については、レッドデータブック掲載種に準ずる情報を整理しておくことが必要なのです。

現状では、ある地域で保全活動等が行われているなど何らかの理由である種が話題になったときにも、その種が県内に生息・生育しているか、県内でどのように分布しているかについて、なかなか情報を得ることができません。

また、ブルーデータブック掲載種についても、その種にどう対応するか検討するためには、

本来ならば近縁の在来種にはどのようなものがあり、それらが県内でどのように分布しているかについての情報を把握する必要がありますが、その情報も得られません。

そこで本県では、県内の多くの研究者の方々の御協力により、県内の自然環境情報の最も基礎となる全種リスト（グリーンリスト）及び各種の県内分布に関する情報を整理し、指標性の高い種に関する1種1頁の情報を加えた、「グリーンデータブックあいち」を作成することとしました。

県内分布に関する情報の蓄積は生物群間で著しく異なっていますが、今回は、既存情報の整理を、それぞれの分類群の自主的な活動の成果を借用する形で進めるため、レッドデータブックやブルーデータブックのように全生物群共通の形式では編集できていません。

また、生物の「目立ち方」は生物群間で著しく異なるため、指標性の高い種について、多く選定できる群もあれば、選定しにくい群もあります。そのため、グリーンデータブックは、生物群ごとにそれぞれやや異なった形式で編集することになります。この維管束植物編は、このように編集されたグリーンデータブックの最初の分冊です。この冊子が、生態系ネットワーク形成の基礎資料として、また自然に関心を持つ多くの方々のお役に立てば幸いです。

平成 29 年 12 月

愛知県環境部自然環境課